

IV 史跡全域と曲輪ごとの植生の特徴

1 史跡内

(1) 本丸(第9図)

ア 本丸の遺構

保存管理計画において、史跡内の中枢にあたることから第1種区域として位置づけられており、調査研究を経て平成35年度から平成44年度に至る第2期整備計画において、盛岡城跡の最も密度の高い遺構整備を行うこととしている。

本丸全域と本丸門跡に至る登城坂、及び乗物部屋跡、廊下橋跡、百足橋跡を含む約4,556 m²の範囲で、本丸内には、かつて南東隅に天守、南西には二階櫓、北西には小納戸櫓と北東の御国産所があり、これを結ぶ長屋門形式の雑蔵があった。そして中央全域には年代によって変遷を重ねた本丸御殿が存在し、南北棟の本丸門南妻柱から南側に南部家の私的な空間である大奥、同じく南妻柱から北側には、藩主や重臣が執務する中奥が存在しており、発掘調査によって建物の礎石が確認されている。

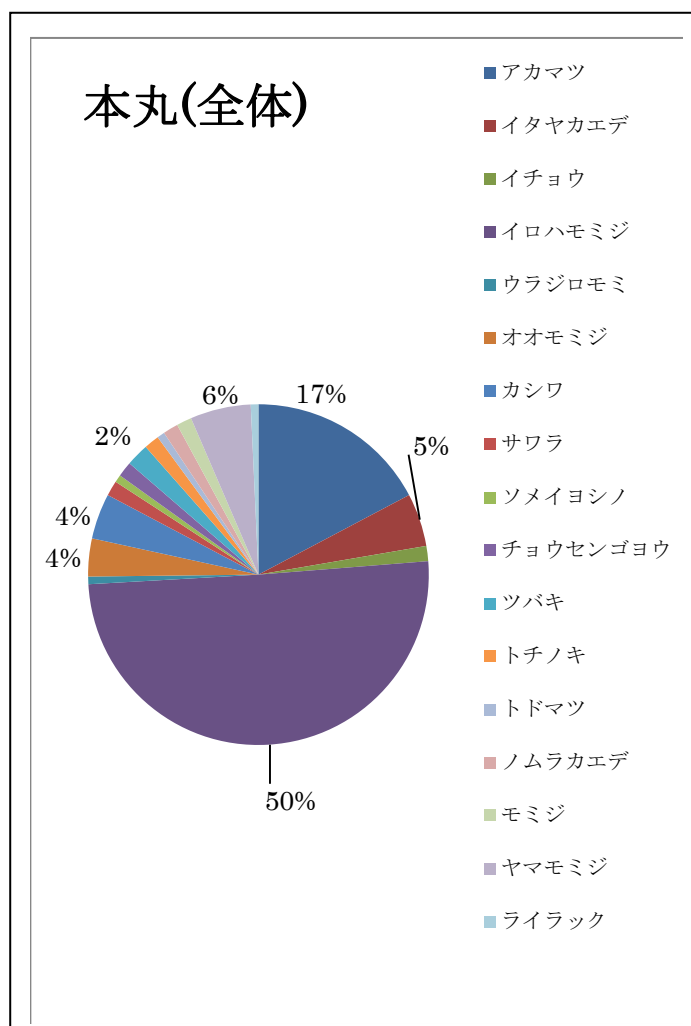
イ 本丸の現状

江戸時代に竈部屋、祐筆、大溜の存在した位置に日露戦争で戦死した南部家第42代当主利祥の「南部中尉騎馬像」の台座があり、天守台には明治39(1906)年の岩手公園開園に伴って設置された四阿「凌虚亭」と西辺中央の藩主の居間が存在した付近には四阿「夕陽亭」がある。また、ベンチのほかキャンプ用のかまど、外灯、電柱、制御盤、位置標識が設置されている。

なお、本丸南側中央から腰曲輪に通じる階段は、公園開園時に設置された。

ウ 本丸の植栽

本丸内の植栽は、モミジ類が整えられた配置で植えられ、その中にカエデ類のほか常緑針葉樹が配されている。



第9図 本丸の植生構成

樹木と本数は、すべて高・中木となっており、アカマツ 15 本、イタヤカエデ 7 本、イチョウ 2 本、イロハモミジ 70 本、ウラジロモミ 1 本、オオモミジ 5 本、カシワ 6 本、チョウセンゴヨウ 2 本、トチノキ 2 本、トドマツ 1 本、ノムラカエデ 2 本、モミジ 2 本、ヤマモミジ 8 本となっている。なお、このうちアカマツは石垣天端南辺部に計画的に配されている。また、本丸門への登城坂には、アカマツ 9 本、サワラ 2 本、ソメイヨシノ 1 本、ツバキ 3 本の高・中木と低木で唯一のライラック 1 本が植えられている。

(2) ニノ丸(第 10 図)

ア ニノ丸の遺構

保存管理計画において、本丸に次いで枢要な地区であることから、三ノ丸や淡路丸、榊山稲荷曲輪、さらには内曲輪の区画施設である鶴ヶ池・亀ヶ池とともに第 2 種区域として位置づけており、平成 35 年度から平成 44 年度に至る第 2 期整備において、盛岡城跡の特徴的な遺構整備と近代公園開設当初の空間的広がり再生する整備を行うこととしている。

範囲は、北側の車門跡から南側は廊下橋跡、東側は不明門跡から本丸門跡からの登城坂下端と廊下橋跡下の曲輪、西側は石垣までの約 6,556 m²の範囲である。なお、ニノ丸跡内には盛岡藩の藩政を担った中ノ丸跡、井戸跡、コシカケ、番所跡が存在した。

イ ニノ丸の現状

ニノ丸の中央は、明治 39(1906)年の岩手公園開園に伴って中ノ丸の石垣が撤去されて平坦となり、また、南西部の虎口が設けられた石垣が撤去されている。公園施設としては西辺南側に明治 39(1906)年の岩手公園開園に起源をもつ四阿「望岳亭」がある。

また、東側に消防義魂碑と警察彰功碑、中央に新渡戸稲造顕彰碑があるほか、南西部に五訓之碑、北側に啄木歌碑、ベンチ、外灯、電柱、位置標識がある。

なお、ニノ丸南西部に設けられた庭園造園の経緯は不明であるが、現代以降の築造である。

ウ ニノ丸の植栽

ニノ丸内の植栽は、モミジ類が整えられた配置で植えられ、その中にカエデ類のほか常緑針葉樹が配されている。曲輪内全域の樹木と本数は、高・中木がイチイ 2 本、イチョウ 3 本、エドヒガン 3 本、カスミザクラ 2 本、カヤ 1 本、コウヤマキ 2 本、コブシ 2 本、ゴヨウマツ 1 本、サワラ 1 本、サンシュユ 2 本、シダレウメ 1 本、シノブヒバ 1 本、チョウセンゴヨウ 1 本、ナンジャモンジャ 1 本、ニガキ 1 本、ハナミズキ 2 本、バンクスマツ 1 本、ヒヨクヒバ 1 本、ミズキ 2 本、モクレン 1 本。低木は、アセビ 10 本、アブラチャシシ 1 本、ウツギ 1 本、カラタチ 3 本、コゴメウツギ 1 本、サツキ 22 本、テマリカンボク 1 本、ドウダンツツジ 45 本、ハギ 2 本、ボケ 3 本、リュウキュウツツジ 7 本が植えられている。また、東側の石垣壁面と補修(はばき)石垣の上面にはケヤキ 3 本が自生し、補修石垣の上面にはイロハモミジ 1 本、ザイフリボク 1 本、ヤマボウシ 1 本の高・中木とイボタノキ 1 本、ニシキギ 1 本、ハナカイドウ 4

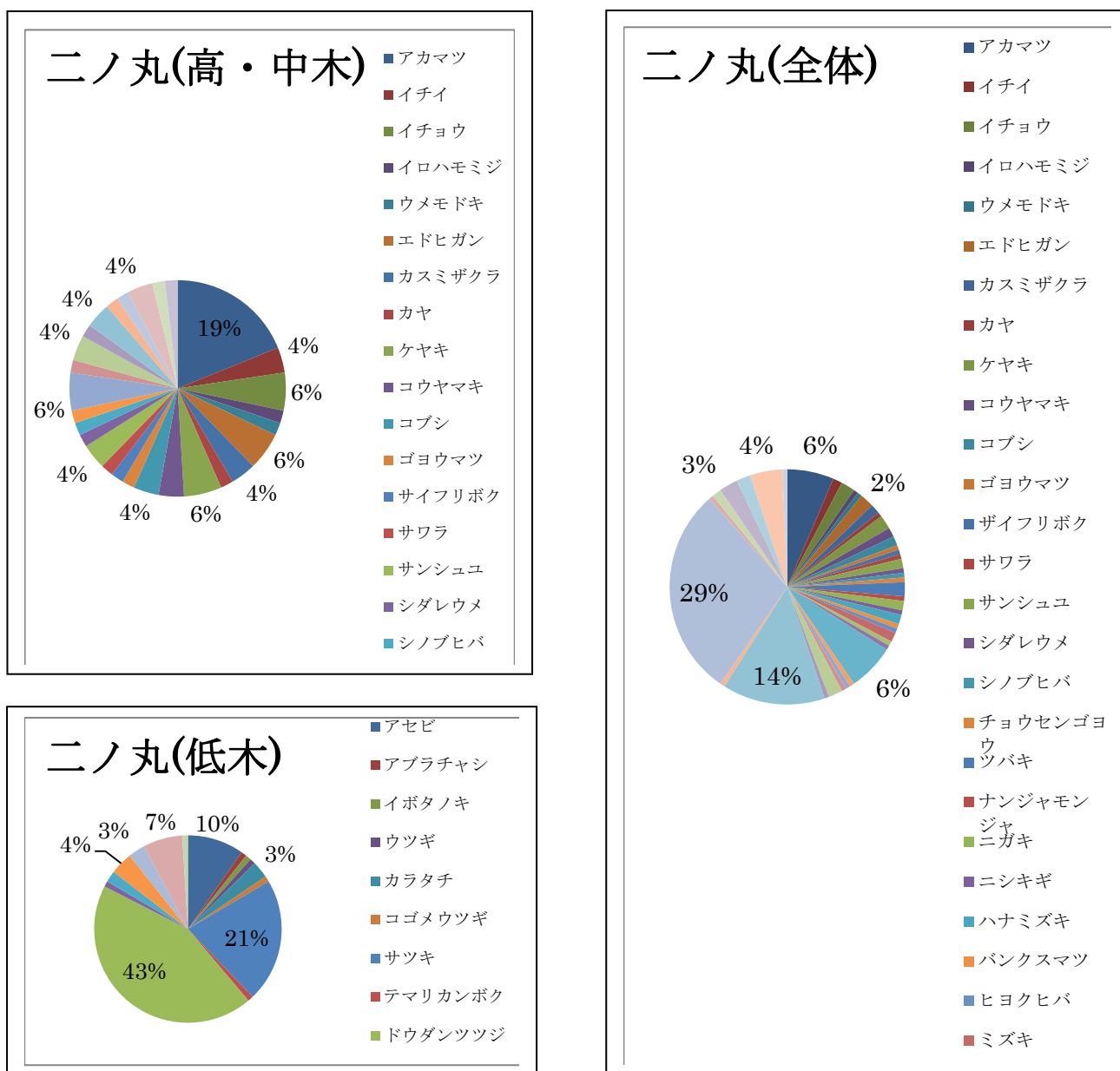
本，ロウバイ 1 本の低木がある。また，石垣下面にはウメモドキ 1 本，ツバキ 3 本，ニガキ 1 本，ニシキギ 1 本が植えられている。さらに，石垣の縁辺や二ノ丸中央にはアカマツ 10 本が配されている。

(3) 三ノ丸(第 11・12 図)

ア 三ノ丸の遺構

保存管理計画において，本丸に次いで重要な地区であることから，二ノ丸などとともに第 2 種区域として位置づけており，平成 35 年度から平成 44 年度に至る第 2 期整備計画において，盛岡城跡の特徴的な遺構整備と近代公園開設当初の空間的広がり再生する整備を行うこととしている。

範囲は，南側の不明門跡，瓦門跡とその登城坂，北側は車門跡の登城坂の下，東側は鳩森曲輪の石垣東端と西側は石垣西端までの約 4,896 m²の範囲である。



第 10 図 二ノ丸の植生構成

江戸時代以降三ノ丸は、江戸時代を通じて祭祀が行われ、またこれに関わる施設があった曲輪である。主な遺構は、年代によって変遷するものの、曲輪の中央から東側寄りに位置する烏帽子岩の南側に大日堂，八幡堂，雷神堂，稲荷。曲輪の東側で一段低地となる鳩森曲輪に神輿堂，奉帛宮，井戸跡。北西隅には太鼓堂，番所。西辺中央には「コシカケ」などが存在した。

明治 33(1900)年に櫻山神社の遷座に伴い、北側中央の石垣が本殿に登る階段設置のために改変され、明治 39(1906)年の岩手公園開園に伴って東側に階段が設けられているが、開園時の岩手公園の正面入口が盛岡城跡西側の菜園側に設けられたことにより、大きな改変がなく推移してきた。

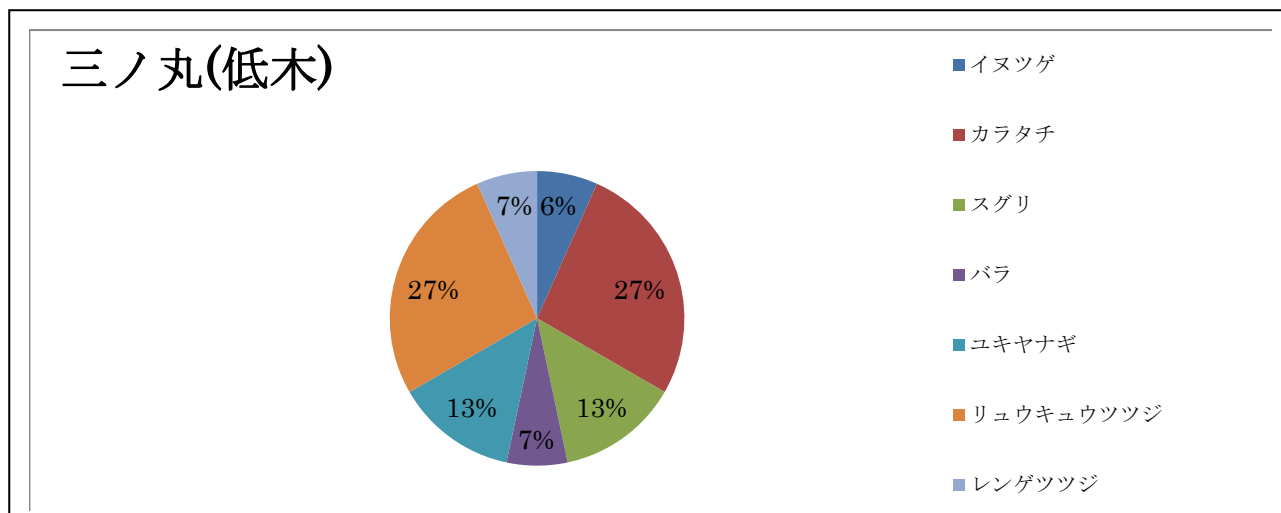
イ 三ノ丸の現状

三ノ丸石垣の北西部北面は大きく孕み出し、さらに西面は大きく陥没するなど変位を生じており、修復を必要とする状態にある。また、この変位に伴い北西部上面の地形も外側に傾斜しており、降雨時の流水が石垣変位の要因との指摘があることから、樹木の伐採を行った上での造成が必要になっている。

公園施設としては、烏帽子岩の南側に明治 39(1906)年の岩手公園開園に起源をもつ四阿「捨翠亭」とトイレ各 1 棟のほか、ベンチや外灯，電柱，位置標識がある。

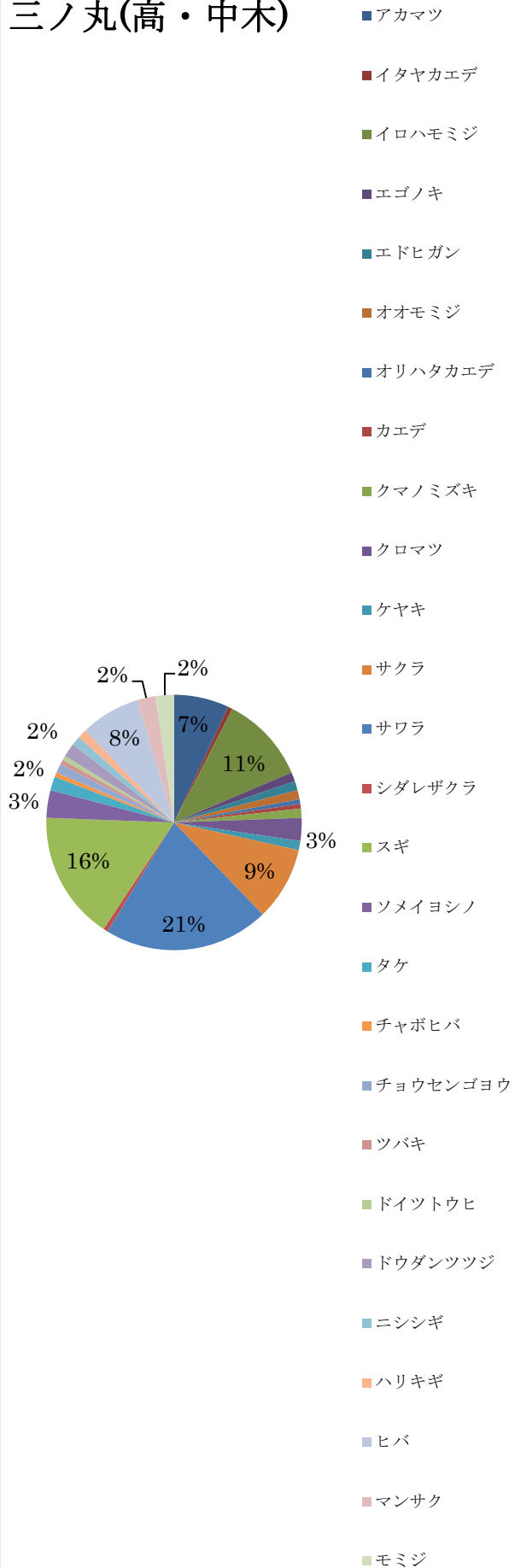
ウ 三ノ丸の植栽

三ノ丸内の植生は、櫻山神社周辺はスギやヒバなどの常緑樹，西側はイロハモミジなどの落葉樹，南東部はサクラが集中する。曲輪内の樹木と本数は、高・中木がアカマツ 12 本，イタヤカエデ 1 本，イロハモミジ 19 本，エゴノキ 2 本，エドヒガン 2 本，オオモミジ 2 本，オリハタカエデ 1 本，カエデ 1 本，クマノミズキ 2 本，クロマツ 5 本，ケヤキ 2 本，サクラ 16 本，サワラ 36 本，シダレザクラ 1 本，スギ 28 本，ソメイヨシノ 6 本，タケ 3 本，チャボヒバ 1 本，チョウセンゴヨウ 2 本，ツバキ 1 本，ドイツトウヒ 1 本，ドウダンツツジ 3 本，ニシギ 2 本，ハリキギ 2 本，ヒバ 13 本，マンサク 1 本，モミジ 4 本。低木はイヌツゲ 1 本，カラタチ 4 本，スグリ 2 本，バラ 1 本，ユキヤナギ 2 本，リュウキュウツツジ 4 本がある。

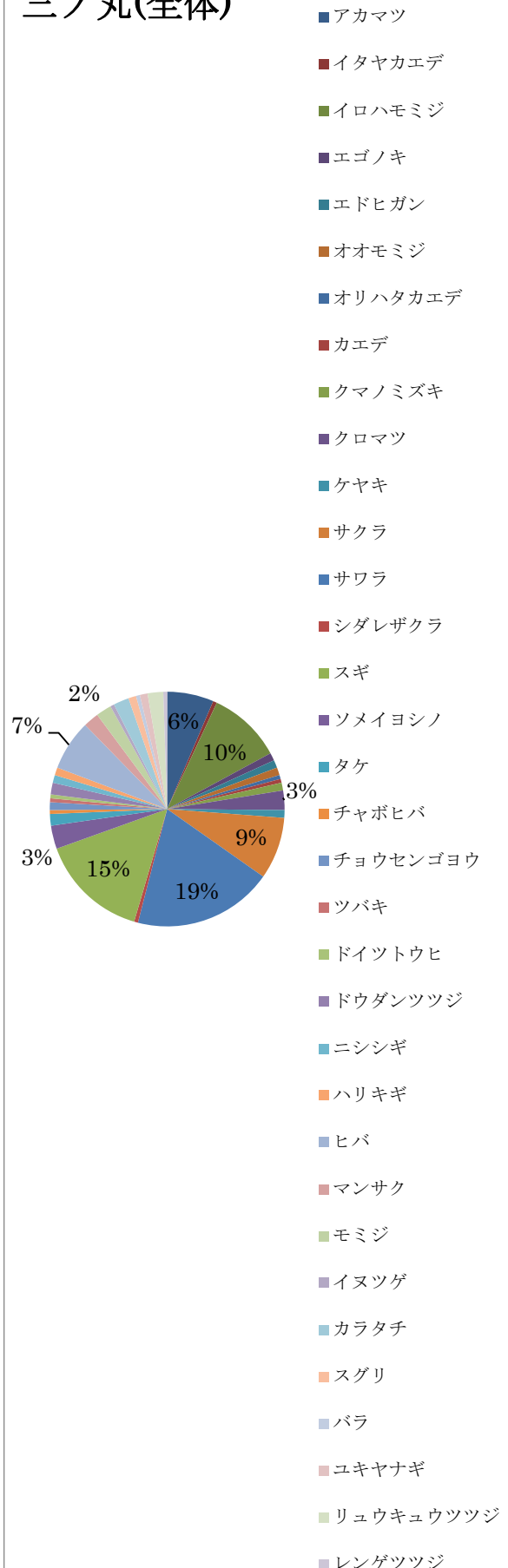


第 11 図 三ノ丸の植生構成(1)

三ノ丸(高・中木)



三ノ丸(全体)



第 12 図 三ノ丸の植生構成(2)

(4) 淡路丸(第13・14図)

ア 淡路丸の遺構と現状

保存管理計画において、本丸跡に次いで重要な地区であることから、第2種区域として位置づけられており、平成35年度から平成44年度に至る第2期整備計画において盛岡城跡の特徴的な遺構整備と近代公園開設当初の空間的広がりを再生する整備を行うこととしている。範囲は、本丸石垣の東・南・西側下の腰曲輪で、面積は約8,548㎡の範囲である。

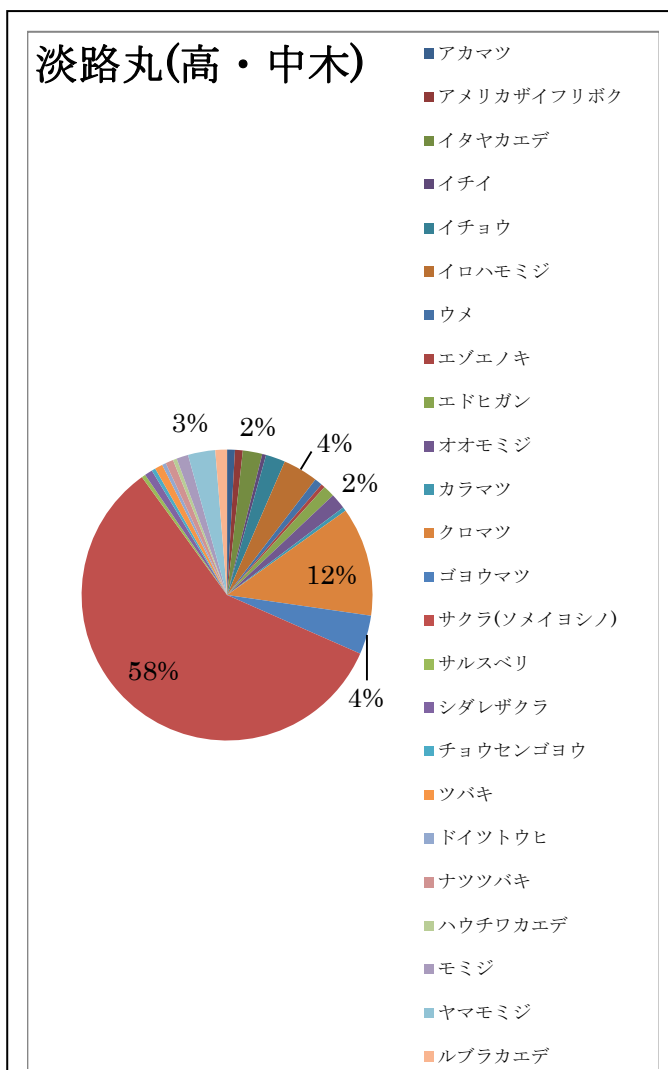
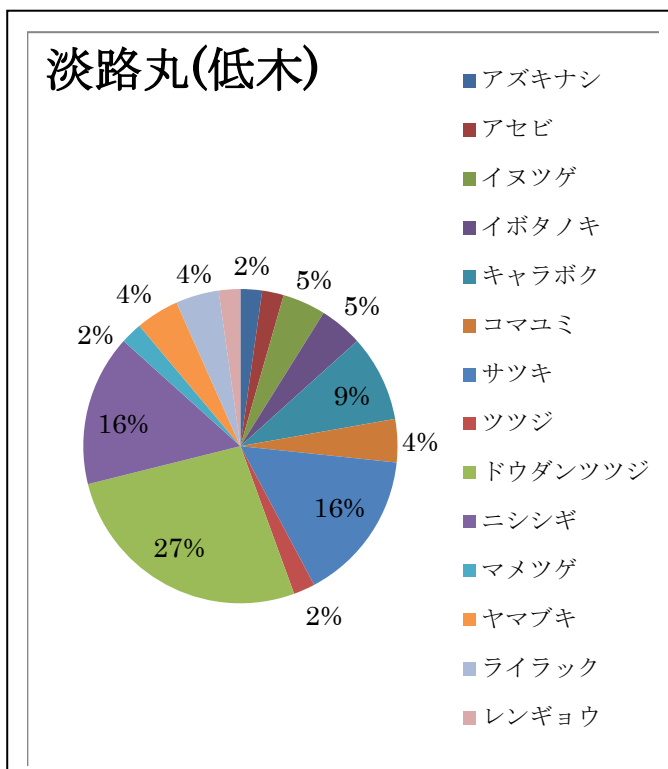
この地区の江戸時代の様相は変遷を経るが、主に南側部分に淡路丸と記載された絵図があり、時代が下るとともに東側に限定された名称に変わっている。明和3(1766)年に描かれた盛岡城図には、東・南・西側それぞれが区画施設で仕切られている。西側には淡路丸と記され北端の一段低地となる曲輪には「オカユヘヤ」と井戸が描かれているだけで、その他の施設は描かれていない。

また、南東部には隅櫓2棟、この北西側には番所や(宝)蔵がある。

なお、本丸南側下には石垣に隣接して馬場が設けられており、馬見座敷も描かれている。

西側は本丸から下る百足橋があり榊山稲荷曲輪に通じている。

この区域は藩主のプライベートな傾向が強く、幕末には入隅部分に本丸南西部の二階櫓から



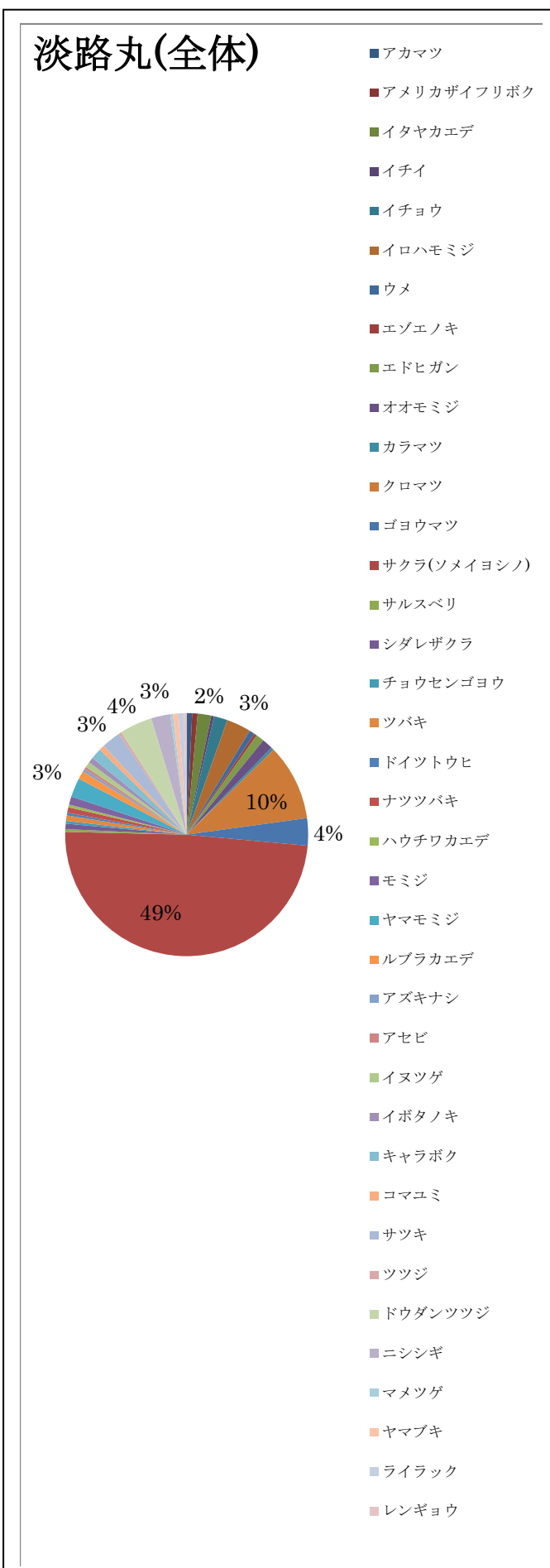
第13図 淡路丸の植生構成(1)

接続して二階建ての「聖長楼」が建築されている。

イ 淡路丸の植栽

樹木と本数は、東側の高・中木がアカマツ1本、アメリカザイフリボク2本、ウメ2本、エゾエノキ1本、エドヒガン1本、ゴヨウマツ2本、サクラ(ソメイヨシノ主体)72本、サルスベリ1本、シダレザクラ2本、ツバキ2本、ドイツトウヒ1本、ナツツバキ2本、モミジ1本。低木はアセビ1本、イボタノキ2本、サツキ7本、ツツジ1本、ドウダンツツジ5本、ニシシギ4本、ヤマブキ2本、ライラック2本、レンギョウ1本がある。なお、「オカユヘヤ」のあった北端の低地の法面には基本的にサツキやツツジなどの低木類が植栽されているが、櫻山大明神があった曲輪にはエドヒガンやウメ、モミジが点在するもソメイヨシノを主体として植えられている。

南側の高・中木は、アカマツ1本、エドヒガン1本、オオモミジ3本、クロマツ8本、ゴヨウマツ8本、サクラ(ソメイヨシノ主体)62本、モミジ1本があり、低木はアズキナシ1本、キャラボク2本、ドウダンツツジ7本、ニシシギ2本がが植えられ、ソメイヨシノが圧倒的に卓越する。この東側から南側にかけては明治39(1906)年の公園整備の際にサクラ林として設計されたことより、園路の内側は開



第14図 淡路丸の植生構成(2)

園当初からの樹木であるが、外側は昭和 60 年以降の石垣修復以後に植えられた。

西側は、イタヤカエデ 5 本、イチイ 1 本、イチョウ 5 本、イロハモミジ 9 本、エドヒガン 1 本、オオモミジ 1 本、カラマツ 1 本、クロマツ 20 本、サクラ 1 本、チョウセンゴヨウ 1 本、ハウチワカエデ 1 本、モミジ 1 本、ヤマモミジ 7 本、ルブラカエデ 3 本があり、低木はイヌツゲ 2 本、キャラボク 2 本、コマユミ 2 本、ニシシギ 1 本、マメツゲ 1 本となっており、イチョウを織り交ぜながら本丸や二ノ丸同様、カエデやモミジ類を主体としている。

(5) 榊山稲荷曲輪(第 15・16 図)

ア 榊山稲荷曲輪の遺構と現状

本丸西側の腰曲輪下に設けられた曲輪で、現在確認できる遺構は井戸跡 1 基のみである。

江戸時代には稲荷社の祠が祀られていたが、戊辰戦争の敗戦に伴い失われた。なお、現在の稲荷社は櫻山神社の本殿西側に祀られており、明治 4 (1871) 年に櫻山大明神の御神体を城内から加賀野の妙泉寺の裏山に仮遷座する際に伴ったと伝えられている。

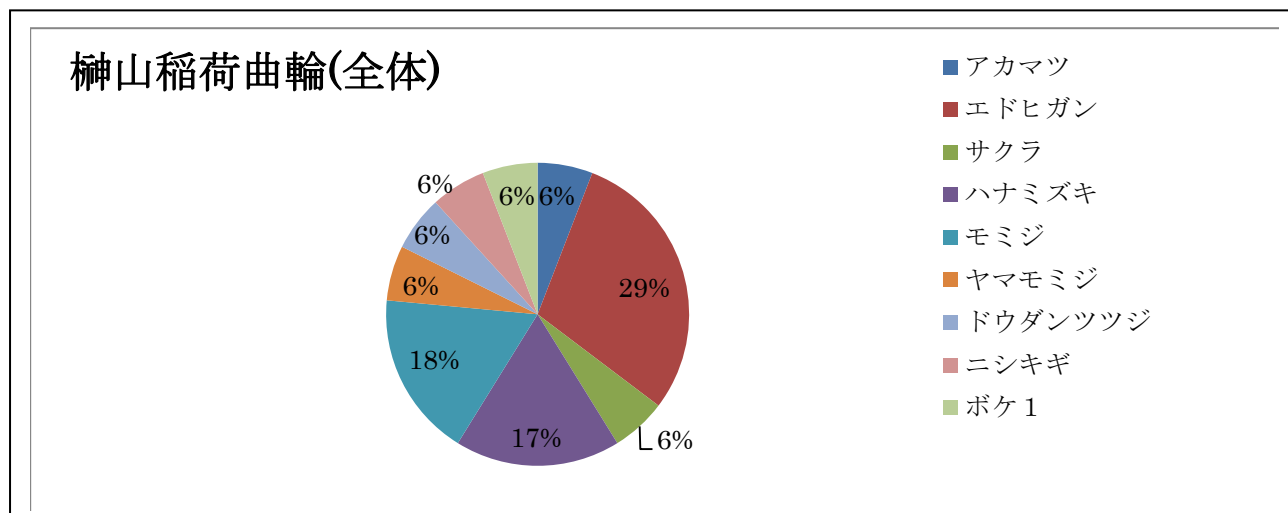
明治 7 (1874) 年の城内の建物撤去以降に撮影された写真には、スギとマツが見えるが現在はない。

曲輪内の東側背面の積み石は、二ノ丸南西部の出角と入角部分を補修するように積み込まれているが、腰曲輪からの階段とともに補修が必要な状態にある。曲輪の面積は約 413 m²の面積で、二ノ丸や三ノ丸同様に第 2 種地区としている。

(6) 台所跡(第 16 図)

ア 台所跡の遺構と現状

江戸時代の台所跡の遺構は、明治 7 (1874) 年の建物払い下げの対象になっていないことから詳細は不明であるが、絵図には現在のトイレと北側の階段の場所に台所門・蔵・番所があり、この南側に広大な台所屋敷、南西隅に井戸があった。



第 15 図 榊山稲荷曲輪の植生構成

また、明治 39(1906)年の岩手公園開園に起源を持つ四阿「双龍亭」の位置に肴部屋があり、以前には(櫻山)大明神が祀られていた。さらに、遊具の位置に武具所、バラ園西側には城内で使用する漆器の製作や修繕をおこなう塗師小屋が描かれており、一帯が城内での食事を賄う台所のほか、工房や練兵場など多様な機能を果たしていた地区であったことが伺える。現在、台所跡から不明門にかけては岩手公園開園に伴って坂道が設けられているが、江戸時代にはバラ園の南側から不明門南東側にある花崗岩の転石南側にかけて直登する坂道があった。

台所地区内に存在した建物の破却時期は不明であるが、明治 22(1889)年に南部家から陸軍大臣秘書官あてに提出された城地の払い下げ願いに関連する図面には描かれていないことから、台所の枡形とともにすべての建物はこの時期までには撤去されていたようである。

また、江戸時代の台所内の地形は、二ノ丸から鶴ヶ池にかけて緩やかに傾斜する地形であったが、岩手公園開園に伴ってほぼ平坦に造成されて運動場となり、現在のバラ園も植物園として整備された。この地区は東側の鶴ヶ池との間には多くの植栽が見られるが、土塁上に育成していることから、鶴ヶ池の植栽として取り扱った。

台所跡の範囲は南・西面の法面を含み、面積は約 8,027 m²である。台所跡は現在、多目的広場として主に都市公園として広範な目的に利用されており、保存管理計画において第 3 種地区に位置付けている。

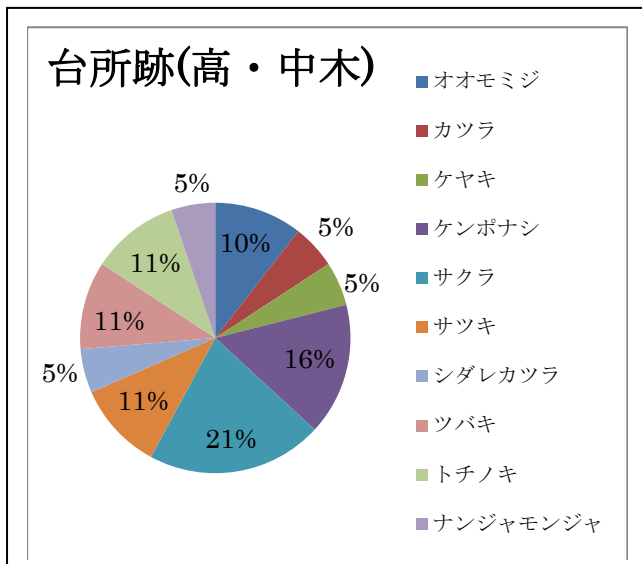
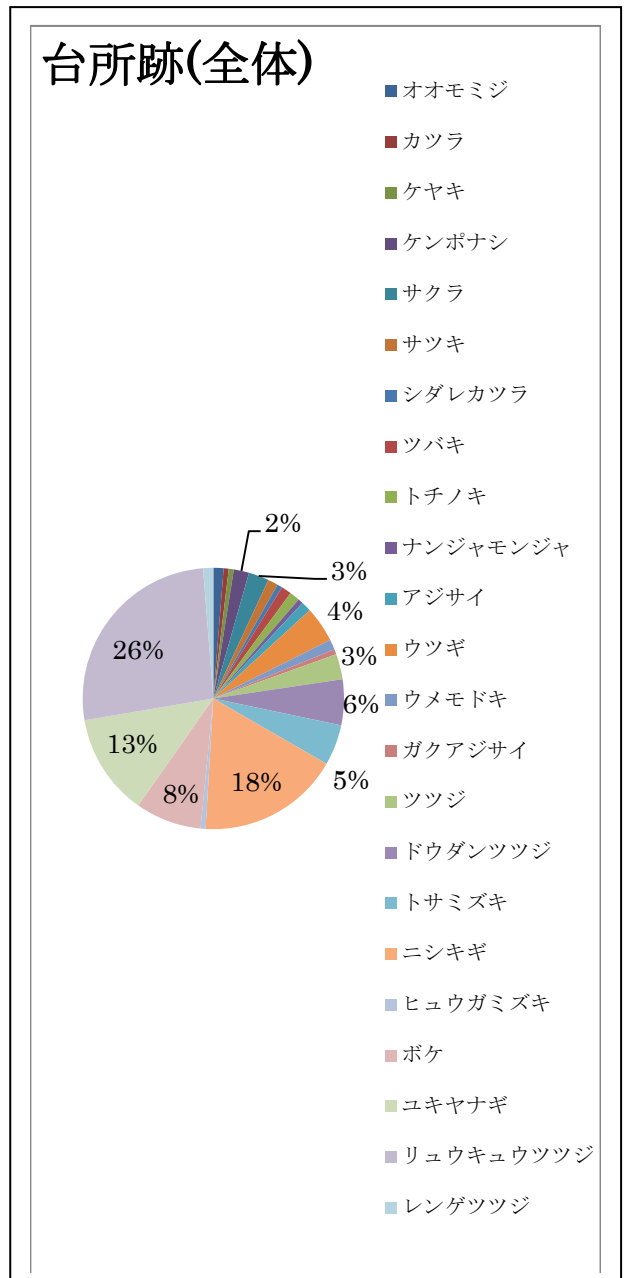
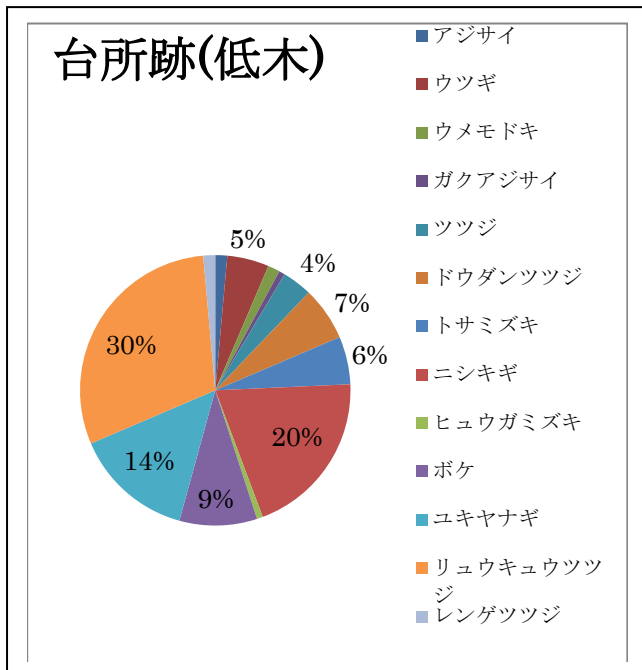
イ 台所跡内の植栽

台所跡の樹木と本数は、オオモミジ 2 本、カツラ 1 本、ケヤキ 1 本、ケンポナシ 3 本、サクラ 4 本、サツキ 2 本、シダレカツラ 1 本、ツバキ 2 本、トチノキ 2 本、ナンジャモンジャ 1 本の高・中木があり、低木はアジサイ 2 本、ウツギ 7 本、ウメモドキ 2 本、ガクアジサイ 1 本、ツツジ 5 本、ドウダンツツジ 9 本、トサミズキ 8 本、ニシキギ 28 本、ヒュウガミズキ 1 本、ボケ 13 本、ユキヤナギ 20 本、リュウキュウツツジ 42 本、レンゲツツジ 2 本がある。

なお、高木は不明門南側にトチノキとシダレカツラ。西側法面の上部にケヤキの大木、中段にカツラがあり、南側法面の上部にはサクラ、下段にはオオモミジがある。

低木類は、西側法面全体にリュウキュウツツジ、法面上段縁辺にドウダンツツジが。南側法面の上段にはユキヤナギ、下段にはニシキギとボケが多い。高木は不明門南側にトチノキとシダレカツラ。西側法面の上部にケヤキの大木、中段にカツラがある。

また、南側法面の上部にはサクラ、下段にはオオモミジがある。低木類は、西側法面全体にリュウキュウツツジ、法面上段縁辺にドウダンツツジ、南側法面の上段にはユキヤナギ、下段にはニシキギとボケが多い。



第 16 図 台所跡の植生構成

(7) 鉛蔵跡(第 17・18 図)

ア 鉛蔵跡の遺構と現状

江戸時代のこの地区は、東側の鶴ヶ池法面と帯曲輪との境には、柵などの区画施設があった。また、本(米内)蔵方面から北側に向かって一段高まりとなり現在、ツバキが植えられている場所にはスギの巨木の中に鍛冶屋門があり、さらに岩手公園開園に起源を持つ四阿「枕流亭」の場所には鉛蔵が存在した。

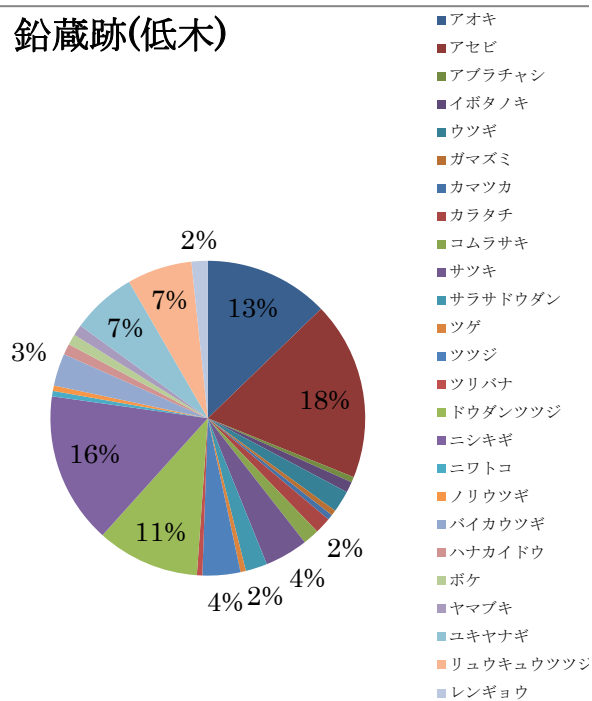
明治 39(1906)年の岩手公園開園に伴い、帯曲輪にあったスギの並木は伐採されてウメ林として整備され、その後鶴ヶ池の西側法面はイロハモミジを主体として再整備された。曲輪の面積は約 5,125 m²の範囲で、保存管理計画において鶴ヶ池は第 2 種区域、帯曲輪を第 3 種区域としている。

イ 鉛蔵跡の植栽

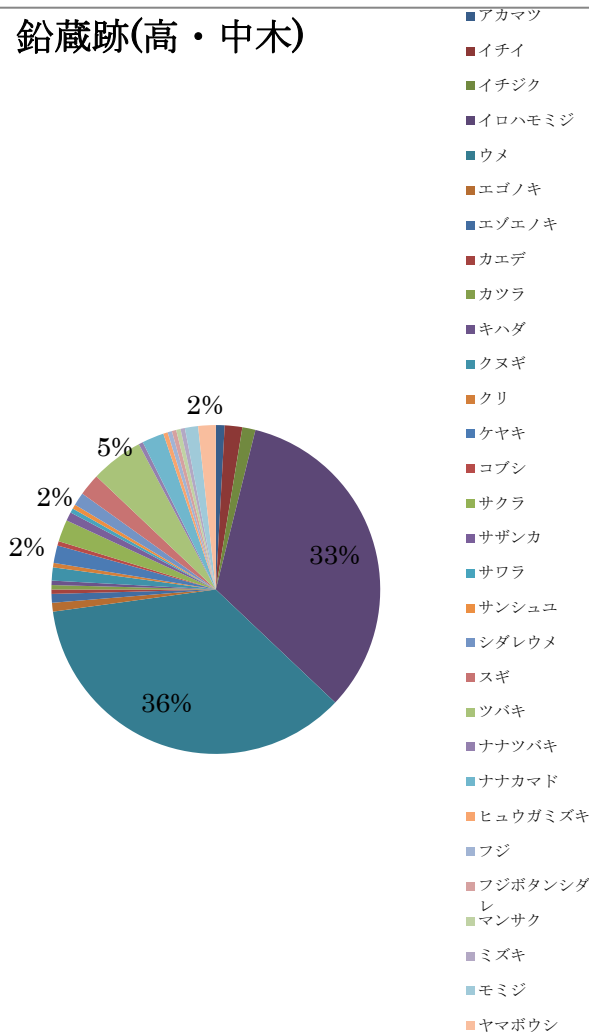
鉛蔵跡の植栽は、高・中木がアカマツ2本、イチイ4本、イチジク3本、イロハモミジ77本、ウメ83本、エゴノキ2本、エゾエノキ2本、カエデ1本、カツラ1本、キハダ1本、クヌギ3本、クリ1本、ケヤキ4本、コブシ1本、サクラ5本、サザンカ2本、サワラ1本、サンシュユ1本、シダレウメ3本、スギ5本、ツバキ12本、ナツツバキ1本、ナナカマド5本、ヒュウガミズキ1本、フジ1本、フジボタンシダレ1本、マンサク1本、ミズキ1本、モミジ3本、ヤマボウシ4本。

低木はアオキ23本、アセビ33本、アブラチャシ1本、イボタノキ2本、ウツギ4本、ガマズミ1本、カマツカ1本、カラタチ3本、コムラサキ3本、サツキ8本、サラサドウダンツツジ4本、ツゲ1本、ツツジ7本、ツリバナ1本、ドウダンツツジ19本、ニシキギ28本、ニワトコ1本、ノリウツギ1本、本、ハナカイドウ2本、ボケ2本、ヤマブキ2本、ユキヤナギ12本、リュウキュウツツジ12本、レンギョウ3本があり、帯曲輪はウメを主体としながら、ツツジ類などの低木類を配している。また、鶴ヶ池沿いには、イロハモミジのほかケヤキやスギなどの高木類が多い。

鉛蔵跡(低木)

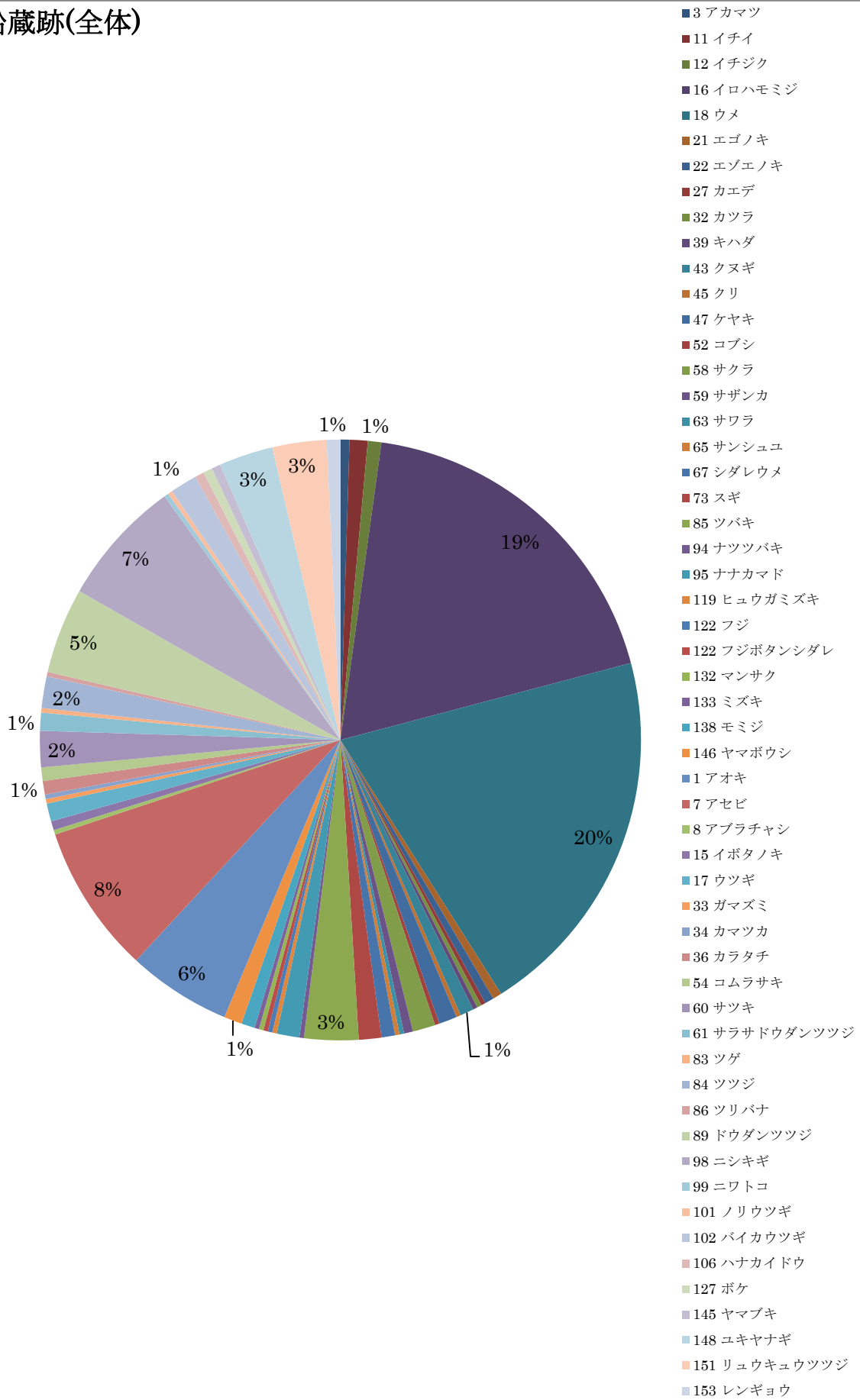


鉛蔵跡(高・中木)



第17図 鉛蔵跡の植生構成(1)

鉛蔵跡(全体)



第 18 図 鉛蔵跡の植生構成(2)

(8)本蔵跡(第19図)

ア 本蔵跡の遺構と現状

江戸時代の本蔵跡地区には、現在の公園管理事務所の南側に米内蔵門があり、東西の東側は中津川、西側は旧北上川まで区画施設で区切られ、さらにこれより低地となる南側は、鶴ヶ池や亀ヶ池と同様の堀が存在したが、現在は民有地となっている。

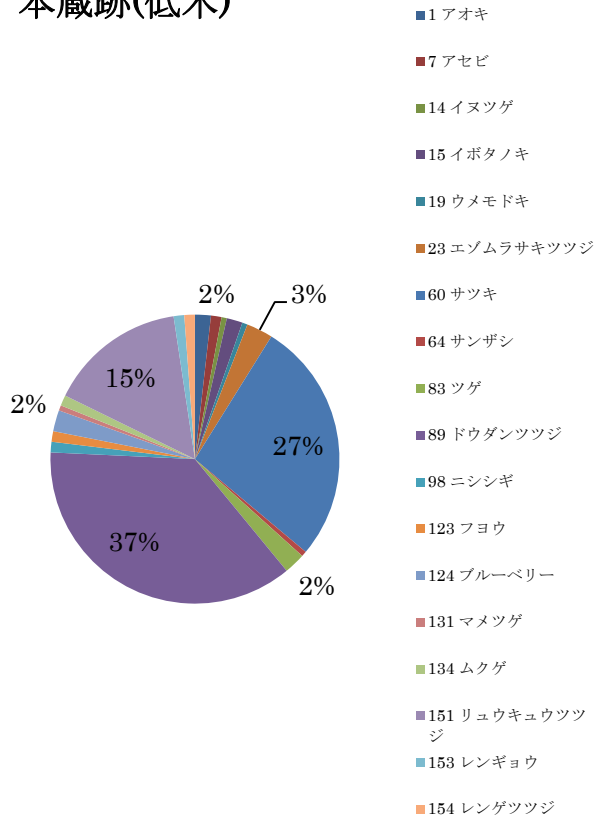
米内蔵跡には現在、西側の都市計画道路下ノ橋更ノ沢線拡張に伴って移設した城内唯一の建築遺構である彦蔵がある。なお、米内蔵は江戸時代初期には本蔵と呼ばれ、西側に坂下門跡の周辺には祖母蔵、孫蔵、彦蔵が存在した。

なお、昭和60年度から実施した淡路丸から鉛蔵跡にかけての石垣修復工事や女学校寄宿舎の移転によって、石垣南東側から南側下にあった従来の植栽は一変され、シダレザクラやサツキなどが植えられているが、史跡境界沿いには高木類が残されている。曲輪の面積は約6,221㎡の範囲で、保存管理計画において、堀跡は第2種区域、帯曲輪を第3種区域としている。

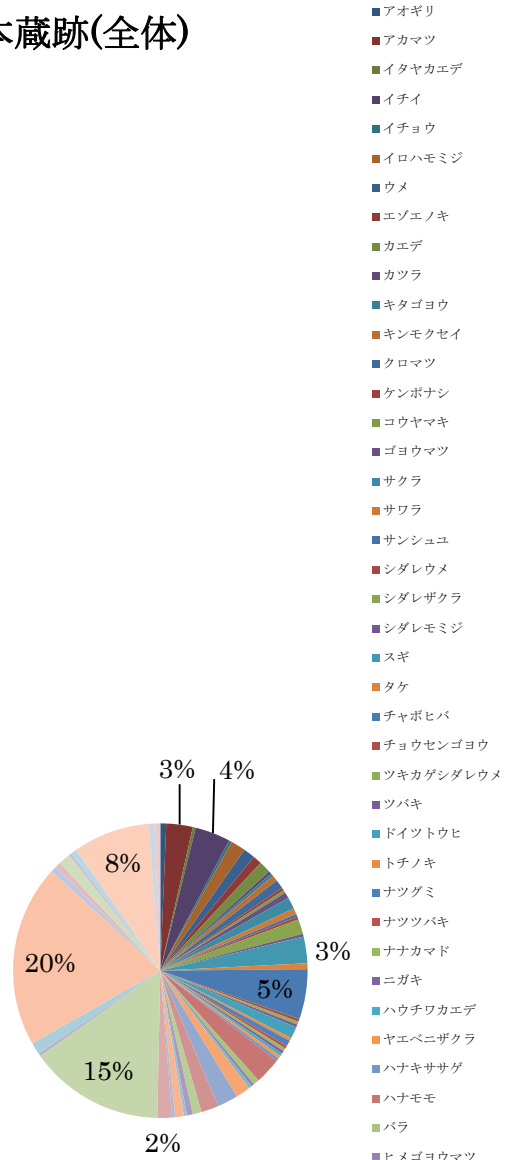
イ 本蔵跡の植栽

本蔵跡の植栽は、高・中木がアオギリ2本、アカマツ9本、イタヤカエデ1本、イチイ12本、イチョウ1本、イロハモミジ5本、ウメ4本、エゾエノキ3本、カエデ4本、カツラ1本、キタゴヨウ1本、キンモクセイ2本、クロマツ3本、ケンポナシ1本、コウヤマキ1本、ゴヨウマツ2本、サクラ4本、サワラ2本、サンシュユ1本、シダレウメ1本、シダレザクラ5本、シダレモミジ1本、スギ9本、タケ2本、チャボヒバ17本、チョウセンゴヨウ1本、ツキカゲシダレウメ1本、ツバキ1本、ドイツトウヒ4本、トチノキ1本、ナツグミ2本、ナツツバキ1本、ナナカマド1本、ニガキ1本、ハウチワカエデ1本、ヤエベニザクラ1本、ハナキササゲ1本、ハナモモ9本、バラ2本、ヒメゴヨウマツ1本、ポポー1本、マサキ5本、モミジ7本、ユズリハ6本がる。また低木は、アオキ3本、アセビ2本、イヌツゲ1本、イボタノキ3本、ウメモドキ1本、エゾムラサキツツジ5本、サツキ46本、サンザシ1本、ツゲ4本、ドウダンツツジ62本、ニシシギ2本、フヨウ2本、ブルーベリー4本、マメツゲ1本、ムクゲ2本、リュウキュウツツジ26本、レンギョウ2本、レンゲツツジ2本がある。

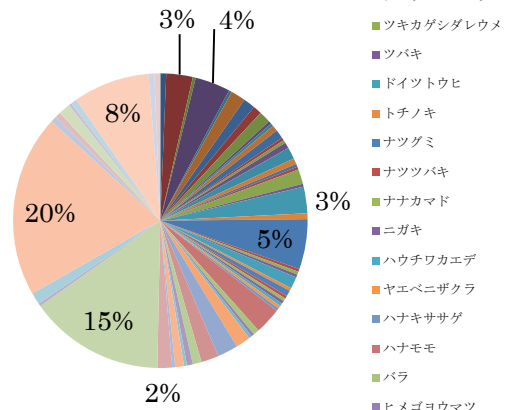
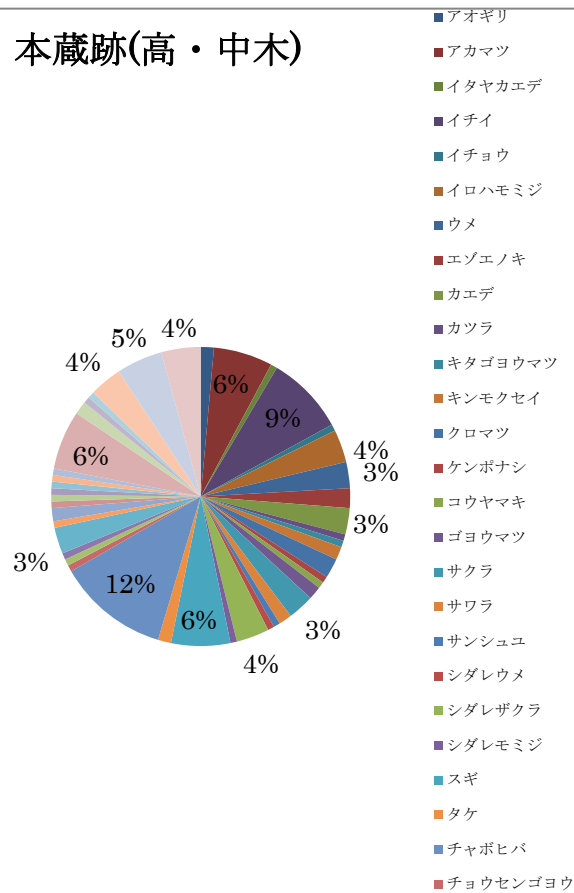
本蔵跡(低木)



本蔵跡(全体)



本蔵跡(高・中木)



第 19 図 本蔵跡の植生構成

(9) 孫蔵跡(第20図)

ア 孫蔵跡の遺構と現状

江戸時代初期の坂下門跡地区は蔵屋敷とも呼ばれ、城の搦手口にあたることから多くの蔵が建てられた。この蔵は時代によって変遷するが、現在の補修石垣の西方に彦蔵。吹上門跡に至る登城坂下で、榊山稲荷曲輪の南側下に孫蔵があった。

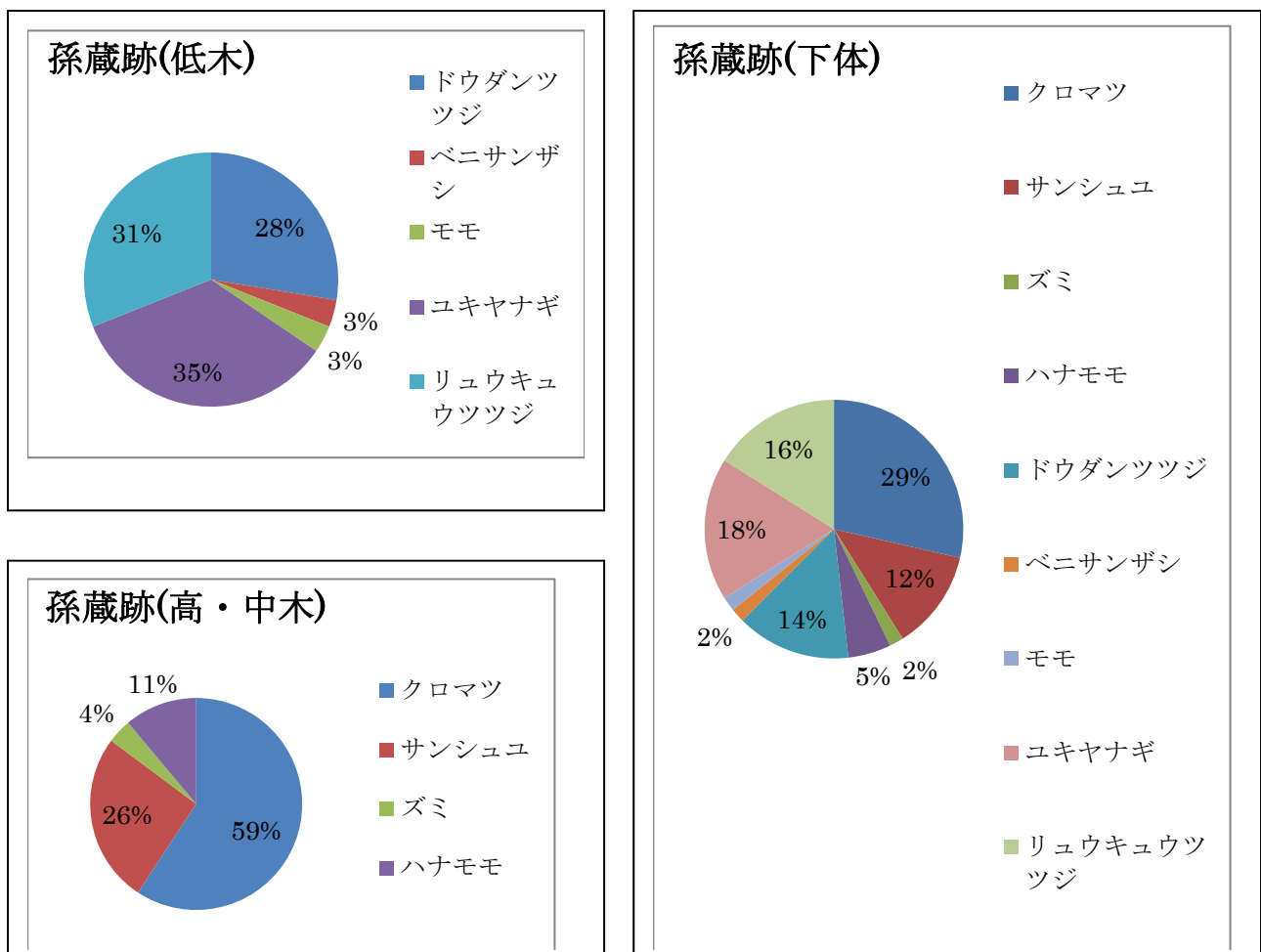
なお、吹上門の登城坂は、明治39(1906)年に岩手公園が整備された際、本来正門である綱門や鳩門地域が櫻山神社の境内地となったことにより、正面として整備されたため緩やかにするためかさ上げされている。

この地区の面積は約1,704㎡の範囲で、保存管理計画において、帯曲輪であることから第3種区域に位置付けている。

イ 孫蔵跡の植栽

孫蔵跡の植栽は、高・中木がクロマツ16本、サンシュユ7本、ズミ1本、ハナモモ3本。低木がドウダンツツジ8本、ベニサンザシ1本、モモ1本、ユキヤナギ10本、リュウキュウツツジ9本があり、坂下門から吹上門に至る登城坂の下と石垣天端にクロマツが集中する。

また、南東隅の補修(はばき)石垣の上部にユキヤナギが植えられ、登城坂下の平坦地にはリュウキュウツツジやドウダンツツジなどの低木類が集中する。



第20図 孫蔵跡の植生構成

(10) 本新蔵跡 (第 21 図)

ア 本新蔵跡の遺構と現状

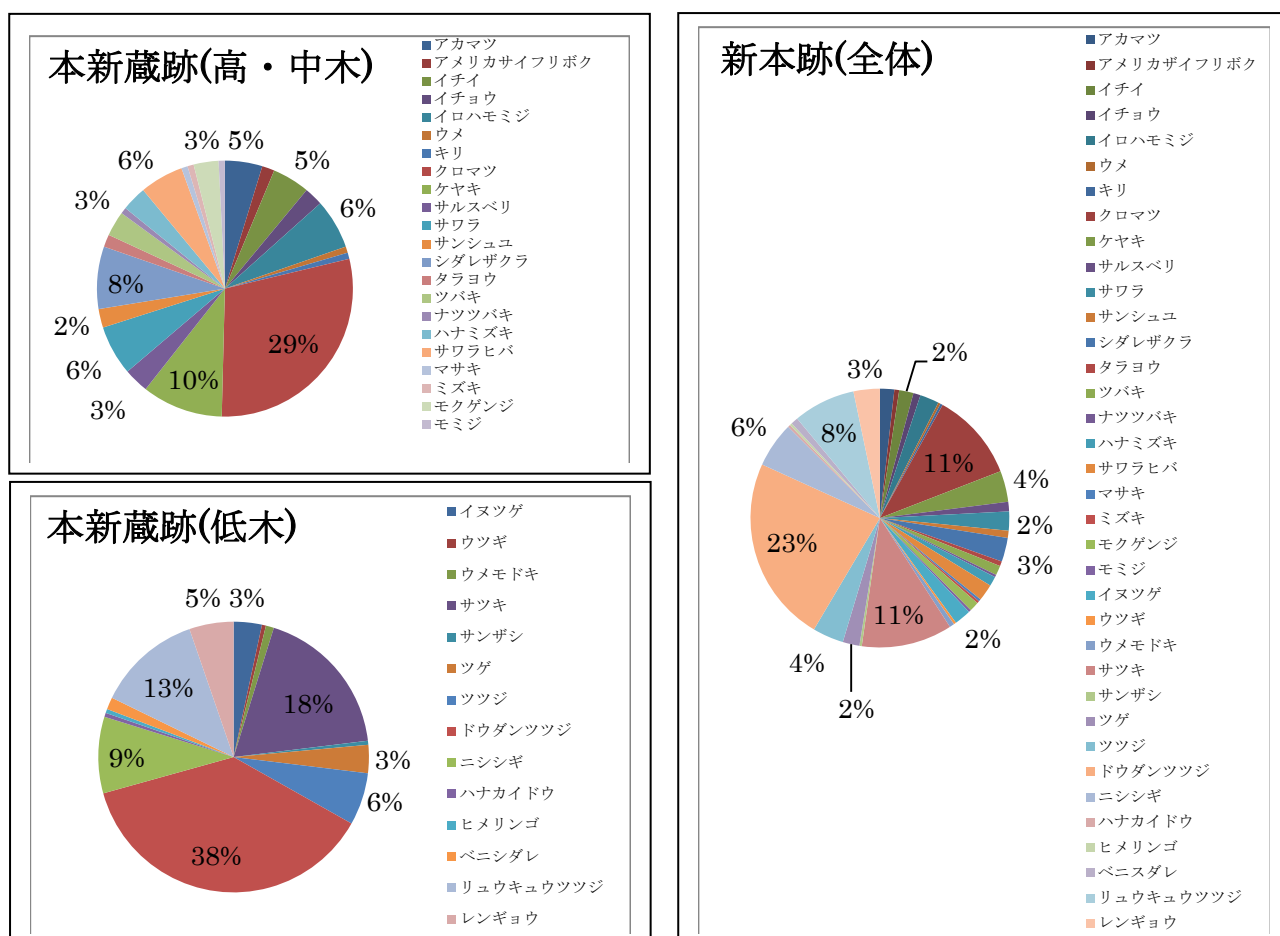
江戸時代初期にはやはり蔵屋敷とも呼ばれ、亀ヶ池と舟入の間に練形門があり新丸に通じていた。地区内の遺構は変遷するが、孫蔵が置かれた時期もあり、江戸時代中期以降には淡路丸の南側下の本蔵に対して新蔵と称した。また、三ノ丸北西部の石垣から東側の地区は本新蔵入口門と柵列によって区画されていた。

この地区には明治期以降、武徳殿やバス会社などが置かれてきたが、昭和 30 年代から 50 年代にかけて徐々に建物は撤去され整備された。

地区の面積は約 6,153 m²の範囲で、保存管理計画において第 3 種区域としている。

イ 本新蔵跡の植栽

本新蔵跡の植栽は、高・中木がアカマツ 6 本、アメリカザイフリボク 2 本、イチイ 6 本、イチョウ 3 本、イロハモミジ 8 本、ウメ 1 本、キリ 1 本、クロマツ 37 本、ケヤキ 13 本、サルスベリ 4 本、サワラ 8 本、サンシュユ 3 本、シダレザクラ 10 本、タラヨウ 2 本、ツバキ 4 本、ナツツバキ 1 本、ハナミズキ 4 本、マサキ 1 本、ミズキ 1 本、モクゲンジ 4 本、モミジ 1 本があり、低木はイヌツゲ 7 本、ウツギ 1 本、ウメモドキ 2 本、サツキ 38 本、サンザシ 1 本、ツゲ 7 本、ツツジ 13 本、ドウダンツツジ 78 本、ニシシギ 19 本、ハナカイドウ 1 本、ヒメリンゴ 1 本、ベニシダレ 3 本、リュウキュウツツジ 26 本、レンギョウ 11 本が植えられている。



第 21 図 本新蔵跡の植生構成

(11) 鶴ヶ池と亀ヶ池(第 22 図)

ア 鶴ヶ池と亀ヶ池の遺構と現状

鶴ヶ池は、盛岡城跡内曲輪の綱門を境として東側の区画施設、同じく亀ヶ池は西側の区画施設として枢要な地域であることから、保存管理計画において第 2 種区域として位置づけている。

鶴ヶ池は、都市計画道路中ノ橋大通線を境に南北に分断されているが、本来は一連の遺構である。北側は明治 33(1906)年に遷座した櫻山神社の境内地となり、南側は明治 39(1906)年に開園した岩手公園の用地となり、後に神社側に神通橋が架けられ、さらに埋め立てしたものである。このことから、北側は江戸時代の平面形を良好に残しているが、南側は長岡安平の設計に基づいた屈曲した平面形となり、さらに長岡の設計上の特徴のひとつでもある護岸石を組んでいる。また、昭和前期には堀跡を畦畔様に区切って、蓮池、金魚池、噴水池などの名称がつけられている。なお、対象地の南限は毘沙門岩までとする。

また、亀ヶ池も同様に都市計画道路中ノ橋大通線によって分断されており、この南北で平面形が異なっており、南側には戦後に引揚者のために架設した店舗用の栈橋が歩道橋となっている。

なお、江戸時代初期の亀ヶ池は、西側が船着場(舟入)となって北上川に注いでいたが、北上川の改修後は湿地となっていたようである。対象面積は、鶴ヶ池が 8,865 m²、亀ヶ池が約 5,834 m²の計約 14,699 m²で、内曲輪の区画施設として重要遺構であることから、保存管理計画で第 2 種区域としている。

イ 鶴ヶ池と亀ヶ池の植栽

中ノ橋大通線の北側の鶴ヶ池の植栽は、高・中木がアカマツ 7 本、イロハモミジ 1 本、エゾエノキ 2 本、エドヒガン 1 本、サワラ 10 本、サンシュユ 3 本、シダレヤナギ 5 本、ソメイヨシノ 3 本、ナナカマド 2 本、モミジ 2 本、ヤエザクラ 2 本、ヤナギ 1 本、ヤマザクラ 1 本。低木がアジサイ 7 本、ウツギ 2 本、キササゲ 3 本、サツキ 1 本、サンショウ 1 本、ツツジ 3 本、ツリバナ 1 本、ドウダンツツジ 2 本、ハナカイドウ 1 本、ボケ 1 本、ユキヤナギ 1 本が植えられており、外側法面にシダレヤナギやサワラ。そして、内側法面にはアカマツ、サクラ、ツツジ、アジサイが多く植えられている。

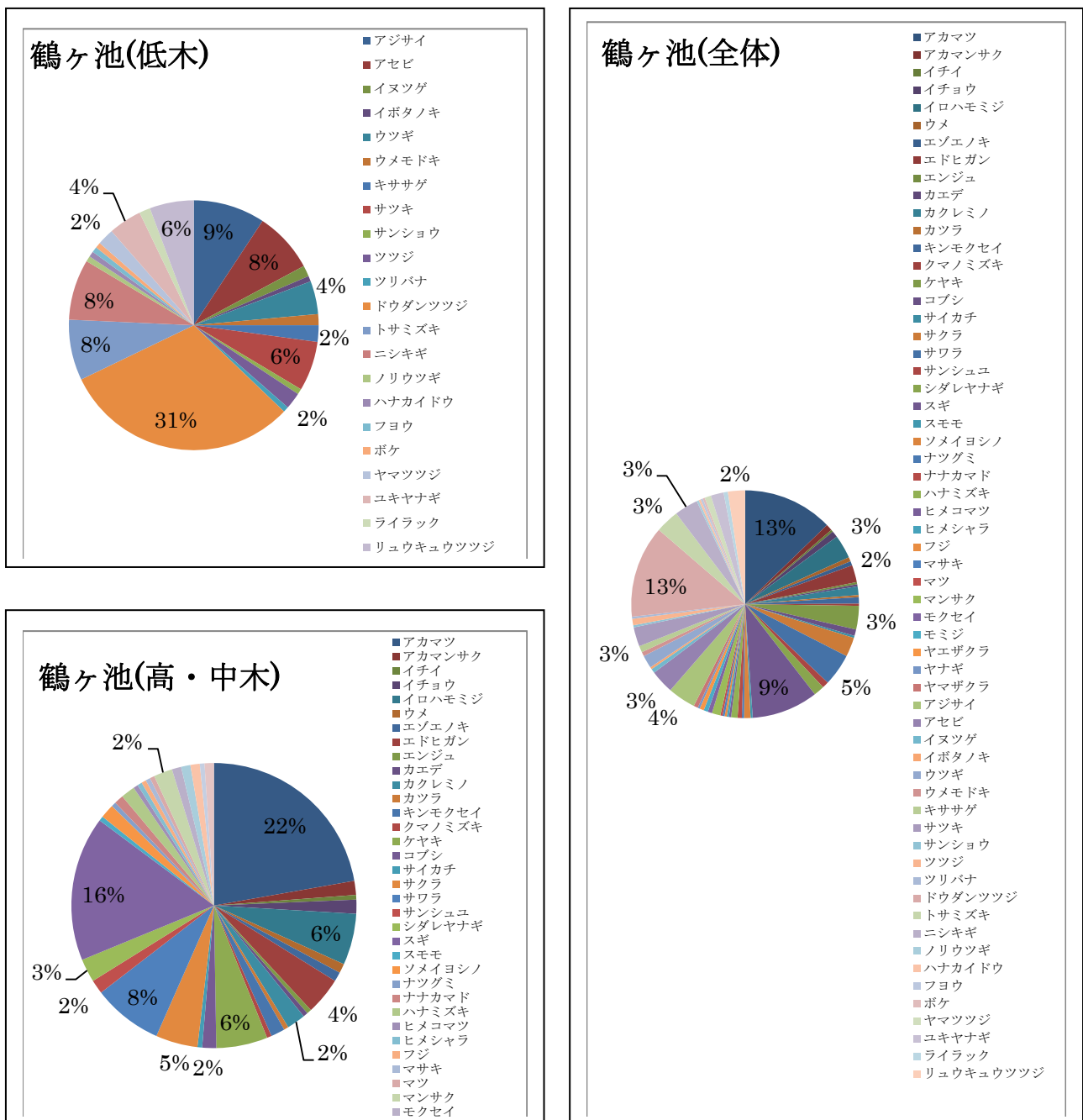
中ノ橋大通線から南側の鶴ヶ池には、高・中木がアカマツ 35 本、アカマンサク 3 本、イチイ 1 本、イチョウ 3 本、イロハモミジ 10 本、ウメ 2 本、エドヒガン 7 本、エンジュ 1 本、カエデ 1 本、カクレミノ 4 本、カツラ 1 本、キンモクセイ 3 本、クマノミズキ 1 本、ケヤキ 11 本、コブシ 3 本、サイカチ 1 本、サクラ 9 本、サワラ 5 本、スギ 31 本、スモモ 1 本、ナツグミ 1 本、ハナミズキ 3 本、ヒメコマツ 1 本、ヒメシャラ 1 本、フジ 1 本、マサキ 1 本、マツ 1 本、マンサク 4 本、モクセイ 2 本、ヤマザクラ 1 本。低木は、アジサイ 8 本、アセビ 11 本、イヌツゲ 2 本、イボタノキ 1 本、ウツギ 4 本、ウメモドキ 2 本、サツキ 8 本、ドウダンツツジ 41 本、トサミズキ 11 本、ニシキギ 11 本、ノリウツギ 1 本、フヨウ 1 本、ヤマツツジ 3 本、ユキヤナギ 5 本、ライラック

ク 2 本, リュウキュウツツジ 8 本がある。

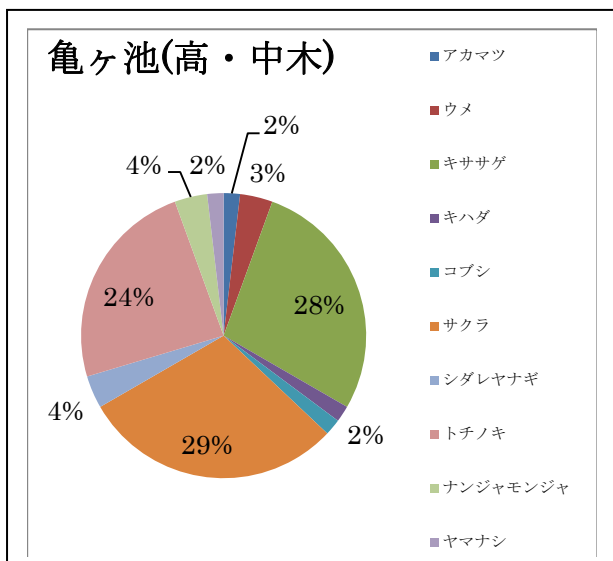
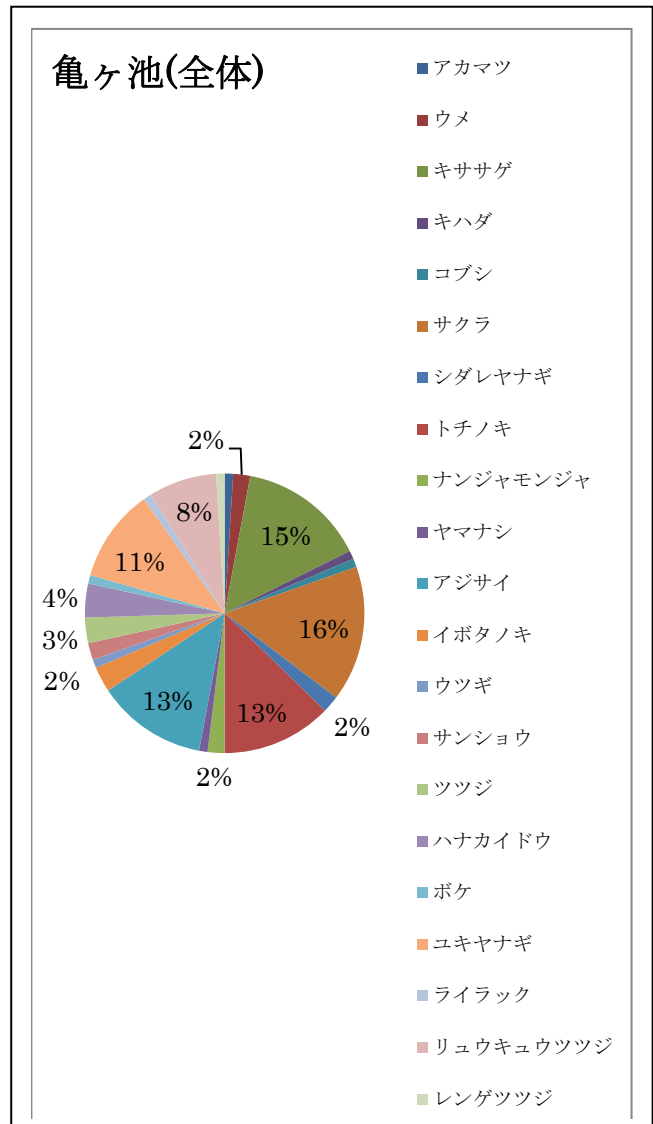
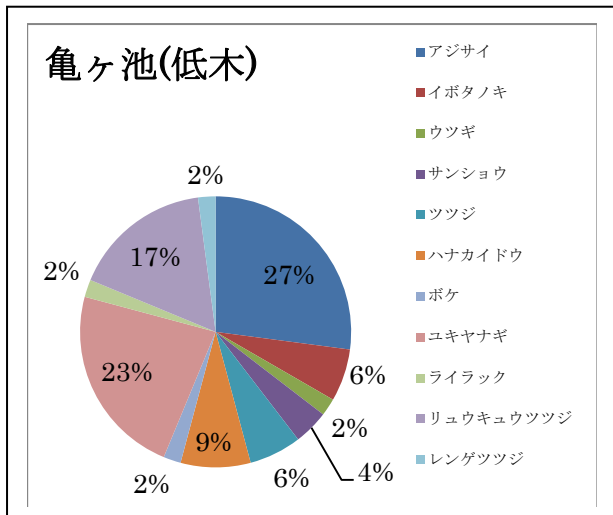
また, 鶴ヶ池の植栽は, 中ノ橋大通線の北側には高・中木がアカマツ 1 本, ウメ 2 本, キササゲ 15 本, コブシ 1 本, サクラ 16 本, ナンジャモンジャ 2 本, ヤマナシ 1 本。低木が, アジサイ 13 本, イボタノキ 2 本, ウツギ 1 本, サンショウ 2 本, ボケ 1 本, ユキヤナギ 11 本があり, 外側法面にサクラ, アジサイ, ユキヤナギ。内側法面にはキササゲを植栽している。

また, 中ノ橋大通線から南側の高・中木はキハダ 1 本, シダレヤナギ 2 本, トチノキ 13 本。低木は, イボタノキ 1 本, ツツジ 3 本, ハナカイドウ 4 本, ライラック 1 本, リュウキュウツツジ 8 本, レンゲツツジ 1 本が植えられている。

なお, トチノキの並木は昭和 30 年代に公園整備の一環として植えられた。



第 22 図 鶴ヶ池の植生構成



第 23 図 亀ヶ池の植生構成

(12) 櫻山神社周辺(第 24 図)

ア 櫻山神社周辺の遺構と現状

櫻山神社は、江戸時代には城内淡路丸に祭られていたが、戊辰戦争の敗戦に伴って、城域が新政府の管理となったことにより、明治 4 (1871) 年に御神体を城内から加賀野の妙泉寺山に仮遷座した。その後北山に移ったが、城域が南部氏に縁故払い下げとなった後の明治 33 (1900) 年に現在の地に遷座した。神社の本殿は三ノ丸北側中央に位置しており、これに至る階段の設置により石垣の一部切り崩している。

また本殿の北側に接続する幣殿、拝殿、参拝口は内曲輪内に存在した蔵跡の石垣の上に位置している。なお、この蔵跡の石垣は後世に大きく改変されているが、根石の一部は残存している。

範囲は、中ノ橋大通線南側で三ノ丸石垣下の神社境内地と参集殿南側。道路北側は商店街の約 11,490 m²の範囲である。

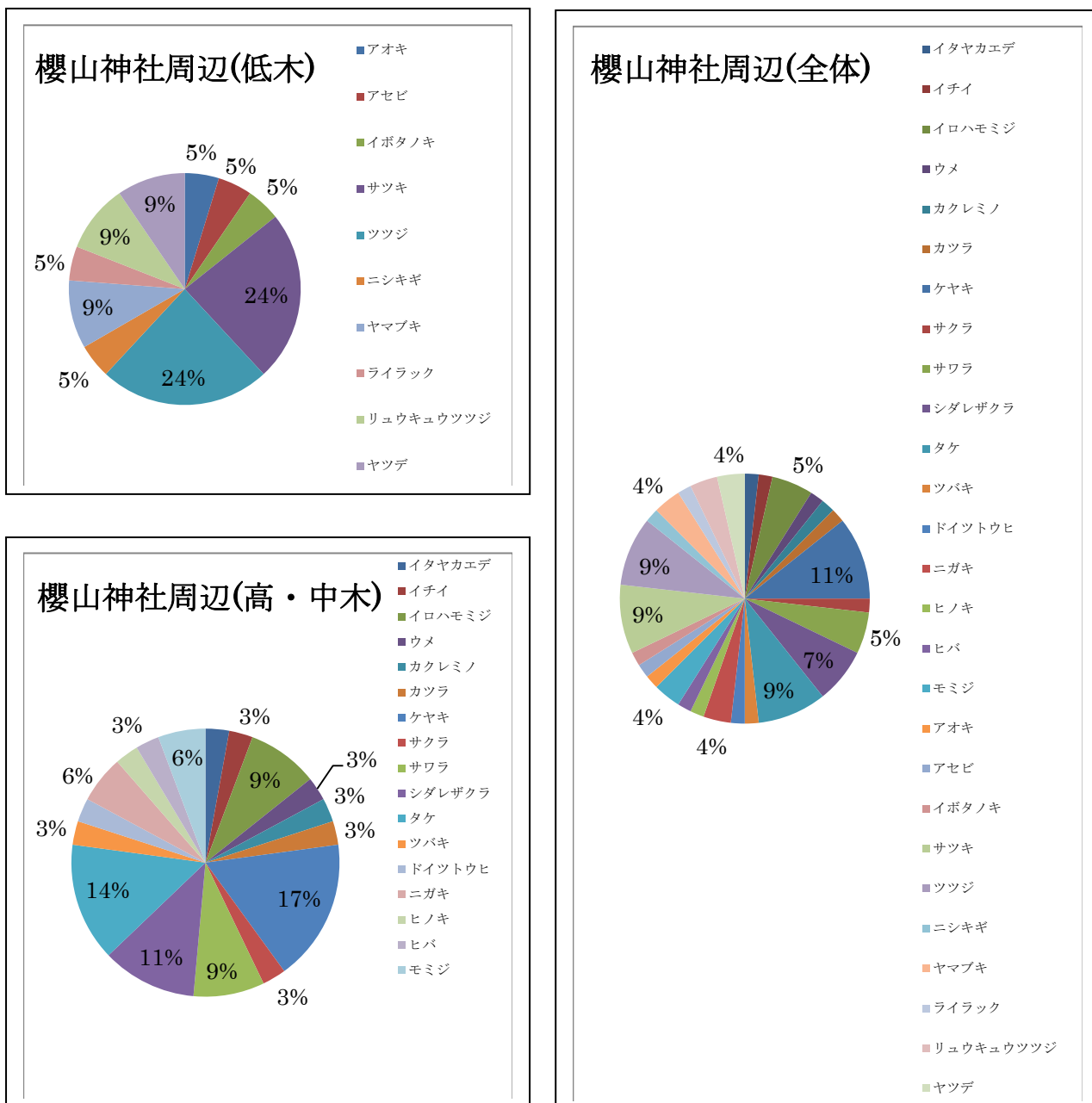
江戸時代に内曲輪の出入口であった鳩門は、神社境内地内、同じく内曲輪の北側にあって正門の綱門は神社参道となり、内曲輪内の北側東半部に存在した勘定所は、社

務所から北東側に接続する参集殿や北側の商店街内の中に位置している。

この地区は、都市計画道路中ノ橋大通線に分断されており、保存管理計画において南側は第3種地区。北側は第4種地区に位置付けている。

イ 櫻山神社周辺の植栽

この地区の植栽は中ノ橋大通線の南側の参道から西側の境内内に集中している。樹木と本数は、高・中木がイタヤカエデ1本、イチイ1本、イロハモミジ3本、ウメ1本、カクレミノ1本、カツラ1本、ケヤキ6本、サクラ1本、サワラ3本、シダレザクラ4本、タケ5本、ツバキ1本、ドイツトウヒ1本、ニガキ2本、ヒノキ1本、ヒバ1本、モミジ2本。低木がアオキ1本、アセビ1本、イボタノキ1本、サツキ5本、ツツジ5本、ニシキギ1本、ヤマブキ2本、ライラック1本、リュウキュウツツジ2本、ヤツデ2本がある。



第 24 図 櫻山神社周辺の植生構成

2 史跡全域と周辺

(1) 盛岡城跡公園周辺

城跡(内曲輪の大部分)については、明治 23(1890)年に南部家が国から縁故払い下げを受け、明治 36(1903)年から岩手県が公園整備計画に着手、明治 39(1896)年に南部家と県知事の間で、「土地使用賃借契約書」を締結し、日々谷公園の設計案の策定等、東京府の公園整備に携わった長岡安平の設計により整備工事に着手、同年 9 月 15 日に岩手公園として開園した。設計にあたっては、地域の自然や特色を活かすことを要諦としており、各曲輪の形状や石垣を大きく改変することなく、四季を楽しめる花木や草花(サクラ、モミジ、アジサイ等)を植栽し、曲輪の平場を芝生広場として、内堀を生かしながら鶴ヶ池を整備するなどの手法がとられてきた。

芝生広場はかつて物産陳列館が存在していた場所でもあり、現在もりおか歴史文化館と隣接する良好な緑地として市民に親しまれている。盛岡城跡公園を代表する全国的なイベントである、いしがきミュージックフェスティバルにおいても仮設ステージが建設される場所の一つとなっており、賑わいを創出するための貴重な空地として捉えられている。芝生広場側からもりおか歴史文化館へ入場するための出入り口も設けられており、観光客にとっては自然を楽しみながら公園内を散策したあとにもりおか歴史文化館へ入場するという主要動線ともなっていると言える。

芝生広場内の植栽としてはマツやスギ、ツツジやツゲ等が存在しており、所々に点在している景石と相まって良好な景観を創出している。

景石・芝生との調和を考える上でも、広場中心部に存在するマツの管理には注意を払うべきである。現在は樹高にして 2.5m から 3m 程度のものが多数となっているが、樹高としては現在の状態を維持することが景観上望ましいと思われる。

したがって、今後の管理にあたっては、2.5~3m 程度の樹高を維持しつつ、景石との調和を意識した樹形維持が必要である。

鶴ヶ池側には樹高の高いマツが多く存在している。このマツや一部の低木があることにより鶴ヶ池の法面保護や池への転落防止など利用者の安全確保の一役を担っていると見える。その反面、芝生広場側から鶴ヶ池を見たときの視界を遮っている箇所があるのも事実である。

したがって、鶴ヶ池側の高木に関しては一部間引くことを検討することとする。公園の内堀を挟んで北側には内丸緑地、約 300m 北東の県民会館北側には緑の広場(旧内丸公園)が所在している。さらに、中津川を挟んだ南側には新渡戸稲造生誕の地が新渡戸緑地として整備されており、城跡の周辺にも良好な緑が保存管理され、現在に至る。

今日まで引き継がれてきた「地域の自然や特色を生かす」という公園開設当初の設計者の考え方を重要視し、原則としては、四季の移り変わりを体感できるような花木や草花、歴史的な修景の維持に大いに寄与し、シンボルとなり得る樹木は優先的に保存管理すべきである。ただし、遺構復元整備や石垣の安全管理上支障となり得る樹木、枯損した樹木等に関しては、公園利用者の安全を確保するため、必要に応じて剪定及び伐採することとする。

(2) 史跡隣接地

ア 内丸緑地

櫻山神社参道地区北側に隣接する内丸緑地(2,949 m²)は、官公庁街の憩いの場として、岩手県において整備され昭和52年に開設されている。

敷地内には、隣接する鶴ヶ池、亀ヶ池沿いに41本のヒマラヤスギが植栽されているほか、キャラボク、ユリノキ、シラカバ、ナナカマド、ヤマボウシの中木～高木、サツキ、ドウダンツツジなどの低木が植栽されている。

日常管理については、指定管理者へ委託されており、植栽についても委託に係る管理業務仕様書の中で管理基準が定められ、これに従って管理されている。

しかし、整備後40年以上経過し、ヒマラヤスギなどの高木化により史跡北辺の間地石垣に根系の侵入による孕みなどの悪影響がみられるほか、高木化した樹木について枝の落下や倒木等の危険が指摘されており、岩手県ではこれらの対応策について広く県民の意見を聞きながら検討を進めることとしている。

イ 芝生広場

芝生広場は鶴ヶ池の東側に位置し、中津川沿いのビクトリアロードまでの広場で、都市公園として昭和45年に整備された。広場は園路により数ブロックに割かれており、きれいに手入れされた芝生は、中心市街地において憩いややすらぎを与える貴重な緑地空間として広く市民に愛されている。

広場東側のビクトリアロード沿いの空間には37本の巨木となったユリノキが年月を感じさせる大きな存在感を示している。その他にも高木となったイチョウ5本やヤエザクラ15本、ツツジ等の中低木類が植栽されている。鶴ヶ池南端のホテルの里と園路に囲まれた空間には、サクラの古木1本、クロマツ、アカマツ、ゴヨウマツ、ウコン、ヒメリンゴ、ツツジ等が植栽されているほか、自生した落葉樹類があり静寂な空間となっている。もりおか歴史文化館西側から鶴ヶ池に架かる橋までの広場には、アカマツやスギなどの高木が50本以上ある。このように芝生広場は周囲を高木類に囲まれ、市街地景観から遮断された静寂な空間となっている。

また、この広場では盛岡市・ビクトリア市姉妹都市提携記念や盛岡市グリーンバンクなど盛岡市内で活動している各種団体の設立記念などを祝して記念樹植栽の場としても利用されている。

芝生広場北側には、平成21～24年度にかけてもりおか歴史文化館とエントランス広場が整備されている。この広場は盛岡城跡公園北側の玄関口となっており、市民の憩いの場として活用されているほか、年間を通じて各種イベントが開催されている。この広場内にも花壇や芝生広場が設けられているほか、昭和45年の整備時に植栽されたヒマラヤスギ、カツラ等の高木が残っている。なお、この敷地には昭和45年の整備当初、県立図書館が整備されたが、盛岡駅西口地区への移転に伴い、盛岡市において跡地を取得しもりおか歴史文化館として整備したものである。この整備にあたって北側都市計画道路沿いのヒマラヤスギの伐採を行ったが、当時、この伐採を巡って多くの市民を巻き込んだ議論が起きた。